

# 同志社 150 年の歴史から 未来を語る

本シンポジウムでは、同志社 150 年の各時代の課題を振り返りながら、同志社の未来を展望します。

● 日時：2026 年 **2** 月 **18** 日（水）17:00～19:00

● 場所：同志社大学 今出川キャンパス 良心館 地下 1  
& Zoom ウェビナー

● 登壇者：

林田 明（同志社大学 名誉教授）、沖田行司（同志社大学 名誉教授）、木原活信（同志社大学 社会学部 教授）、和田喜彦（同志社大学 経済学部 教授）、小原克博（同志社大学 神学部 教授、良心学研究センター長）、中村信博（同志社女子大学 学芸学部 特任教授）、神田朋美（同志社女子大学 嘱託講師）

● 司会：小原克博

（同志社大学 学長、良心学研究センター長、神学部教授）

● コメンテーター：

望月詩史（同志社大学 法学部 教授）

■ 問い合わせ 同志社大学 良心学研究センター **CONSCIENCE**

E-mail : rc-csc@mail.doshisha.ac.jp <http://ryoshin.doshisha.ac.jp>

良心を世界に—良心を覚醒させる知の連携と知の実践

# 『同志社物語—150年の歴史と精神を語り継ぐ』目次

## 第1章 同志社前史—若き新島襄の旅と志（1843～1874年）

林田 明

1. はじめに
2. 向学心の高まり
  - (1) 江戸から函館へ
  - (2) 脱国と洋上の経験
3. 新島襄は何を学んだのか
  - (1) ニューイングランドの生活
  - (2) 岩倉遣外使節団への随行
4. 宣教師としての帰国
5. まとめ—同志社の森の苗木  
【コラム1】ヒッチコック学長とクラーク博士

## 第2章 新島襄の挑戦—草創期の同志社（1875～1890年）

沖田行司

1. はじめに
2. 京都の文化復興と新島襄
  - (1) 山本覚馬の近代構想
  - (2) 新島襄の学校創設計画
3. 同志社英学校の創設
  - (1) 山本覚馬と新島襄
  - (2) 智徳論争と同志社
  - (3) 徳富蘇峰の良心論
4. 新島襄と自由民権運動
  - (1) 私学の役割
  - (2) 新島襄の自由の観念
5. 大学設立運動
  - (1) 明治専門学校と同志社大学の設立
  - (2) 新島襄と渋沢栄一
  - (3) 新島襄の憂鬱
6. まとめ
  - (1) 私学精神
  - (2) 智徳並行の教育

【コラム 2】 新島襄と同志社に愛された男——松本五平

【コラム 3】 同志社校友会

### 第 3 章 キリスト教と同志社——新島没後の混迷と胎動（1891～1911 年）

木原活信

1. はじめに
  2. 「同志社綱領」削除問題
    - (1) 教育勅語
    - (2) 小崎弘道らの辞任
    - (3) 「同志社綱領」削除問題
    - (4) 「同志社綱領」削除問題の影響——横井ら総辞職
  3. 「訓令第 12 号」と同志社——「宗教と教育の衝突」論争
    - (1) 井上哲次郎「談話」
    - (2) 「訓令第 12 号」
    - (3) キリスト教系諸学校の抵抗
    - (4) 同志社の反応
  4. キリスト教社会福祉の源流「同志社派」の誕生
    - (1) 新神学の影響
    - (2) 留岡幸助の福祉実践
    - (3) 「同志社の本流」山室軍平
    - (4) 近代福祉の礎を築いた同志社派
  5. まとめ——歴史的教訓
    - (1) キリスト教主義（理念）が揺らぐとき、その代償は大きい
    - (2) エネルギーが内部ではなく社会に発せられるとき、新たな原動力となる
- 【コラム 4】近代日本の福祉史を変えたミュラーの同志社礼拝堂での説教（1887 年 1 月）

### 第 4 章 同志社諸学校の発展——デモクラシーと植民地主義の狭間で （1912～1929 年）

和田喜彦

1. はじめに
2. 時代背景——大正デモクラシー、およびキリスト教の社会的地位向上
  - (1) 国民の不満と「大正デモクラシー」の社会的運動
  - (2) 日韓併合とその後
  - (3) キリスト教徒の活躍とキリスト教の社会的地位向上
  - (4) 時代背景のまとめ
3. 原田助社長/総長時代の後半の同志社
  - (1) 原田助の社長就任までの経緯
  - (2) 専門学校令による大学設立

- (3) 学校経営規模拡大と学生数の増加
- (4) 国際主義——人類愛と奉仕の精神を育むために
- 4. 海老名弾正総長と同志社
  - (1) 海老名弾正の同志社への功績
  - (2) 海老名弾正の日本社会への貢献
  - (3) 海老名弾正の戦争論/朝鮮伝道論と内村鑑三・柏木義円の「非戦論」
- 5. まとめ
  - 【コラム 5】 安中教会——上州安中に蒔かれた一粒の種

## 第 5 章 戦争と同志社——キリスト教主義学校の苦悩と教訓（1930～1945 年）

小原克博

- 1. はじめに
- 2. 戦時下の同志社
  - (1) この時代における課題と背景
  - (2) 「同志社事件」の発生
  - (3) キリスト教主義の変節
  - (4) 総力戦体制下の同志社
- 3. アジア、世界を視野に入れて
  - (1) 朝鮮——尹東柱を中心に
  - (2) 台湾——台湾留学生を中心に
  - (3) 国家とキリスト教——ドイツを事例に
  - (4) 国家への従順か、反逆か——緊張の中から見える「良心」(conscience)
- 4. まとめ——現在そして未来に備えるための教訓
  - (1) 時代精神に対する挑戦としてのキリスト教主義
  - (2) キリスト教主義と国際主義の連携
  - (3) 平和主義の再構築
  - (4) 自由の拠点として同志社
  - 【コラム 6】 同志社アーモスト館——同志社とアーモスト大学の交流の象徴
  - 【コラム 7】 尹東柱に対する名誉学位贈呈式および追悼式

## 第 6 章 同志社の再建——総合大学の出発（1945～1960 年）

林田 明

- 1. はじめに
- 2. 新制大学の発足
  - (1) 終戦直後の教育政策
  - (2) 総合大学の誕生
- 3. 寄附行為に示された教育理念

- (1) 寄附行為の変遷
- (2) 「智徳並行」の意義
- 4. 一般教育の展開
  - (1) リベラル・アーツと一般教育
  - (2) 湯浅八郎とオーテス・ケーリ
  - (3) 一般教育の変質
- 5. まとめ—同志社は再生したのか
  - 【コラム 8】同志社女子部の母、メリー・フローレンス・デントン
  - 【コラム 9】同志社とスポーツ

## 第7章 学生運動と大学改革—大衆化された大学の中の学生たち (1961～1980年)

中村信博

- 1. はじめに
- 2. 時代背景
  - (1) 世界規模での社会変革の時代
  - (2) 冷戦体制下の世界
  - (3) 高度経済成長がもたらした日本社会の矛盾
- 3. 主語としての学生群像
  - (1) 大学大衆化の時代
  - (2) 政治の季節と学生たち
- 4. 1969年・同志社女子大学では
- 5. 1969年・同志社大学では
  - (1) 学生運動・抗議活動・学内封鎖
  - (2) 学生自治・寮・高校の動向
  - (3) 政治問題と学内問題の共振
- 6. 回復の兆し
- 7. 「良心—共通認識」形成の試み
  - (1) 自由大学
  - (2) 自主講座
  - (3) 他者の視点から
- 8. まとめ—混乱した時代から何を学び、何を課題とするのか
  - (1) 学生運動後の大学
  - (2) 深山大沢
    - 【コラム 10】大学管理法案—大学自治と公権力
    - 【コラム 11】学園浸透スパイ団事件／在日同胞留学生スパイ事件（韓国）1975年11月22日

## 第8章 二校地問題と大学教育の変容——管理される私学（1981～2003年）

沖田行司

1. はじめに
  2. 同志社大学の校地問題
    - (1) 校地面積の不足
    - (2) 田辺校地と新島裏
  3. 大学の大量化と田辺移転
    - (1) 文系と理系の二校地化
    - (2) 田辺移転反対の論理
  4. 大学の自立性と教育改革
    - (1) 政治主導型の教育改革
    - (2) 認証評価制度の導入
  5. まとめ
    - (1) 二校地化の克服
    - (2) 校友や地域の学びを提供
- 【コラム12】 ミスター・ラグビーと呼ばれた男——平尾誠二と同志社ラグビー

## 第9章 21世紀の同志社——教育体制の発展（2004年～現在）

神田朋美

1. はじめに
  2. 2004年以降の同志社高等教育の様相
    - (1) 教育理念の傾向
    - (2) 新設学部学科・研究科設置に見える教育体制の傾向
  3. まとめ——私学同志社の誇り
- 【コラム13】 京田辺キャンパスの二つの礼拝堂

## 第1章 同志社前史—若き新島襄の旅と志（1843～1874年）

林田 明

### （1）脱国の志と洋上の回心

幕末、黒船来航などの出来事を背景として、社会の混乱や欧米列強の圧力に不安を感じた多くの若者が洋学を学び、そのうち何人かは海外への留学を志した。長州五傑や薩摩藩遣英・遣米使節団の留学生など、彼らの多くが藩や幕府の支援を受けて渡航したのに対し、新島は自らの意思でただ一人、『聯邦志略』や『漂荒紀事』といった書物、聖書の解説書などを通じて知った自由な世界への憧れを抱いて旅立った。

函館を出発してからアメリカに至るまで、またボストン入港後も新島は多くの苦難を経験し、不安な日々を過ごした。しかし、様々な人たちとの出会いや偶然の機会を見逃さず、アメリカで学ぶという希望を実現させた。ワイルド・ローヴァー号の船上で漢訳聖書を読み進めた新島は宗教的回心を経験し、武士の子から近代的自由人へというアイデンティティの変化を確かなものにしていった。

### （2）アメリカン・ボードとの出会い

ボストンに到着した新島は、マサチューセッツの名門校、フィリップス・アカデミーとアーモスト大学で学ぶ機会を得た。アーモスト大学はピューリタンの伝統のもと、教会の指導者や教養ある市民を養成することを目的としたカレッジであった。新島は数学や自然科学、神学などを学びながらリベラルな知の精神を身につけ、理学士の称号を得て卒業した。新島が高等教育を受けることができたのは、アメリカ最大の海外宣教組織、アメリカン・ボードの主要メンバーであったアルフィーアス・ハーディー夫妻の支援によるものであった。

新島は大学卒業後、アメリカン・ボードの拠点であったアンドーヴァー神学校に進み、会衆派の宣教師となった。1874年10月、ヴァーモント州ラットランドのグレイス教会で開かれたアメリカン・ボードの年次大会において、日本に向かう宣教師として挨拶の機会を与えられた新島は、日本にキリスト教の学校を設立したいという思いを訴えた。それに感動した聴衆から合計約5,000ドルの寄付の約束が得られ、この資金が同志社の礎となった。

### （3）岩倉使節団の教育調査への随行

1872～73年、新島は明治政府が派遣した岩倉遣外使節団の教育調査に随行した。森有礼や田中不二麿から岩倉使節団の調査への協力を求められた際、国家の臣下としてではなく契約に基づき随行すると主張したことは、自由な市民としての新島の姿を示している。

欧米の市民社会に見聞を広げた新島は、地域の共同体や自主的に組織された団体が病院などの公共施設を運営していること、また専門的な科学技術の教育を行う大学が次々と開校している状況を知った。このような経験は、新島の大学設置構想に影響を与えたと考えられる。

## 第2章 新島襄の挑戦——草創期の同志社（1875～1890年）

沖田行司

### （1）同志社の創設が京都に与えた衝撃

同志社は永らく禁教令の下にあったキリスト教に基づいて創設されたが、神社仏閣を中心とする伝統文化を持った京都で何故可能となったのか。これまで、同志社の創設に関しては、京都市民の厳しい批判と排撃をうけた排耶の側面が強調されて来たが、京都には同志社を受け容れる客観的な要因が存在したことを明らかにした。1969年に天皇が東京に居を移し、それに伴い多くの公家や関連した機能が京都から東京に移動した。京都の復興政策として、開化政策が展開され、同志社の創設はそれを推進するものとして機能した。本稿では論じていないが、同志社の出現は仏教各宗派の自己革新にも大きな影響を及ぼしたことも銘記されるべきことである。

### （2）智徳論争と同志社

新島が同志社を創設したのは日本の啓蒙の時代に相当する。王政復古に始まる近代日本は1870年ごろから開化政策に転じた。教育政策の立案者の中心が神道や国学者から洋学者に取って代われ、1872年の学制令では実学を中心とした主知主義の方針を採用した。しかし、同志社の創設期頃より、政府内部での反開明派を中心に徳育を中心とした教育政策を主張し始める。とりわけ西南戦争後の主導権争いで、元田永孚らの天皇側近派は徳育の優先を主張して伊藤博文ら開明官僚派と対立した。この智徳論争は後に徳育論争として展開され、新島の在世中の大きな思想課題とされたが1880年の教育勅語の渙発をもって終焉した。新島はそうした世論の動向に対して智徳並行の教育を主張したが、同志社に入学した頃の徳富蘇峰はキリスト教主義の徳育に対して儒教的な良心論を主張し、やがて同志社と基督教から離れていった。

### （3）新島の自由主義と私学精神

同志社は京都府下の自由民権運動の結社が創設した教育組織のセンター的な役割を果たしていた。新島は南山城（現京田辺市）の三山木に創設された南山義塾の新校舎の開校式に臨席し、私学の役割と教育方針についてのアドバイスを与えている。しかし、板垣退助にキリスト教への入信を勧めた新島は、自由民権運動の政治主義に対して徐々に距離を置き、道徳を持たない政治主義の弊害を批判するようになった。また、政府の私学抑制政策に対して、近代国家の形成に不可欠な自立した国民を養成する私学の役割を主張し、大学設立運動に邁進した。新島の私立大学設立運動には、封建時代の官尊民卑を厳しく批判した渋沢栄一も賛同し、募金運動に協力を申し出た。国民が創設する私学にこそ、青年の自由と可能性を重んじる教育が可能になると両者は考えたのである。新島が考えた私学精神は、国家の私学助成と各種補助金を受けるための条件整備という形で、形骸化しつつある今日、再度想起する必要がある。

### 第3章 キリスト教と同志社——新島没後の混迷と胎動（1891～1911年）

木原活信

#### (1) 「同志社綱領」削除問題

1896年、同志社尋常中学校の政府認可のために、「教育勅語」の趣旨に沿った道德教育を行い、卒業式や入学式でのキリスト教式の宗教儀式を取りやめた。これによりアメリカン・ボードとの軋轢が生じた混乱の責任を問われ、小崎弘道は同志社社長を辞任した。浮田和民と柏木義円も引責して辞職した。また、1898年の徴兵改正により、徴兵猶予の「特典」を得るため、「悉ク通則ヲ適用ス」「本社ノ綱領ハ不易ノ原則ニシテ決シテ動カス可ラズ」という文言を削除した。この措置が綱領の骨抜きとなる妥協と受け止められ、校友会、組合教会、宣教師は、時流にすり寄った方針に反発した。混乱の責任をとって横井、安部、湯浅らは辞職した。

時代の要請に迎合し、その場しのぎの妥協によってキリスト教主義が揺らいだ結果、社長以下の相次ぐ辞任、宣教師の離反など深刻な混乱を招き、甚大な損失を被った。キリスト教と同志社を象徴する出来事であるが、大学の運営において「地の塩」としてのキリスト教の役割の重要性を教えられる。それを忘れ去るとき、大きな代償を払うことになるという歴史的教訓を学ぶ必要がある。

#### (2) 「訓令第12号」と同志社——「宗教と教育の衝突」論争

1890年の「教育勅語」を受けて、1892年、井上哲次郎が「宗教と教育との関係についての談話」を発表して「教育ト宗教ノ衝突」論争が引き起こされた。従来どおりキリスト教教育の儀式等を行う場合には、私立学校の「特典」とされてきた上級学校進学資格および徴兵延期という特典を剥奪され、各種学校扱いとみなされた。青山、明学、関学は、明確な「抵抗」を示した。同志社は「他の学校がぎりひらいた成果にあずかることしかできなかった」と評価されている通り、「まことに巧妙というか、安直というか、ソツのない決議」をしたと言える。

今後キリスト教主義の大学は巨大な国家権力と対峙する可能性があるが、単独での対峙はおよそ不可能である。対峙するには、単独ではなく同じ主義の大学が国内外において連帯と共闘をはかる必要がある。

#### (3) キリスト教社会福祉の源流 「同志社派」の誕生

もう一つ重要な点は、欧米由来の自由主義神学（新神学）の影響が挙げられる。同志社はこの神学論争の中心となったが、一方で新島の教えを受けた同志社出身者たちが果敢に社会へ進出し、現実の社会問題の解決に奔走し、社会福祉の領域で大きな働きをなした。その影響もあり、後に「同志社派」として称される潮流が形成され、大きな役割を果たすことになる。その代表格とされる留岡幸助、山室軍平らは特に著名であり、近代社会福祉の礎を築き、現在に至るまで強い影響を与えている。

このことは、現代の大学にとっても重要な歴史的教訓である。大学がエネルギーを内部に滞留させ、自閉的な運営に陥ると、対立や分裂を招くおそれがある。しかし、そのエネルギーを外に向け、社会や世界に対して主体的に働きかけるならば、それは社会を変える大きな推進力となることを、歴史は教えてくれている。

## 第4章 同志社諸学校の発展——デモクラシーと植民地主義の狭間で (1912~1929年)

和田喜彦

### (1) 時代背景、そしてキリスト教徒の活躍とキリスト教の社会的地位向上

明治末期から昭和初期にかけて、日本は「大正デモクラシー」の時代を迎えた。普通選挙の実現を目指す民衆運動が広がる一方、1910年の日韓併合を皮切りに、帝国主義・植民地主義が台頭した。このような政治的二重構造の中で、キリスト教は社会改革運動や福祉活動を通じて社会的地位を向上させ、教育界・思想界でも重要な役割を担った。同志社に縁のある人物たち、たとえば新渡戸稲造、内村鑑三、矢内原忠雄らの活躍もこの時代の特徴である。キリスト教が国家に「貢献する宗教」として認知され始めたことは、同志社にとって追い風となった。

### (2) 原田助総長時代：キリスト教的国際主義の展開と大学設立

1907年に就任した第7代総長・原田助は、「人類的観念 (Sense of Humanity)」の涵養を重視し、キリスト教の精神に基づく国際主義教育を推進した。1912年には同志社大学が「専門学校令」により設立され、新島襄の「大学設立の宿志」が実現。同年には女子部にも専門学部が設けられた。さらに、原田は米欧アジアへ自ら講演旅行に赴くだけでなく、国際的ゲストを招いた「科外講演」を積極的に実施し、学生の人格形成を志した。その結果、学生数は急増し、同志社の教育規模も飛躍的に拡大した。一方、学内では「宗教教育の形骸化」や「量の拡大と質の低下」への批判も強まり、原田は1919年に辞任を余儀なくされた。だが、原田はその後もハワイ大学で日本学を教えるなど、国際平和と教育に尽力した。

### (3) 海老名弾正総長時代：時代潮流の受容と大学の発展

1920年に就任した第8代総長・海老名弾正は、①人格主義、②大正デモクラシー、③インターナショナリズム、④男女平等主義を四本柱として大学改革を進めた。1920年には「大学令」による大学昇格を果たし、1922年には日本で3番目となる男女共学制度を導入するなど、新島襄の精神を継承し改革を進めた。また、国際連盟協同志社学生支部の設立を支援し、国際主義教育を奨励した。しかし一方で、朝鮮伝道においては日本の植民地主義を肯定し、同化政策にキリスト教を利用する姿勢を取った点で、内村鑑三や柏木義円といった非戦・反帝国主義的なキリスト者と対立した。海老名が朝鮮伝道を「神の使命」と位置づけた点は、朝鮮民族への同化政策や人権侵害・殺戮に加担する結果を招いたことが否定できない。

### (4) 近代日本の歴史から学ぶべき教訓と同志社の使命

今日、世界と日本は再び不安定な状況に直面している。こうした中、近代日本の経験から私たちが学ぶべき教訓は多い。たとえば、国際紛争の解決に武力を用いないという日本国憲法の平和主義の意義、宗教的な偏見や宗教右派による他宗教信徒への人権侵害やジェノサイドの問題、思想・信条の自由を国家権力からどのように守るかという課題が挙げられる。

こうした現代的課題に向き合う上で、同志社に求められる使命は明確である。それは、「キリスト教主義」に基づく倫理観（例：神の被造物であるすべての生命の尊厳を尊重する精神）、「愛人主義（国際主義）」、そして「自由主義」という同志社建学の精神を日本と世界に向けて「社会実装」していく責任を負っているのではないだろうか。新島襄が19世紀に米欧で学んだキリスト教精神のエッセンスを現代バージョンに進化させ、世界に発信することが急務だと考える。

## 第5章 戦争と同志社——キリスト教主義学校の苦悩と教訓（1930～1945年）

小原克博

### （1）時代精神に対する挑戦としてのキリスト教主義

思想統制が強まった時代において、同志社を同志社たらしめるキリスト教主義は、教育勅語を中心とする国家主義イデオロギーとの調和を求められた。新島が同志社の徳育の基本としたキリスト教主義は、旧時代から続く儒教主義と明瞭なコントラストをもち、それを代替するものであったが、この時代、そうしたコントラストが意図的にあいまいにされた。

戦争の時代のような厳しい思想統制が今後なされなかったとしても、キリスト教主義がもつエッジが丸められる危険性はいつの時代にも存在している。人を変え、社会を変えてきたキリスト教の「濃密」なエッセンスをどのように継承していくかは、いつの時代も新たに問い直される必要がある。

### （2）キリスト教主義と国際主義の連携

戦時下においては、キリスト教主義が国家主義イデオロギーとの調和を求められ、キリスト教主義と国粹主義が連携するような事態となった。偏狭な愛国心を超える必要性を説いた新島において、キリスト教主義と国際主義（新島はこの語を使っていないが）は表裏一体であった。

我々が今後キリスト教主義を、ナショナリズムを含め、特定の時代精神の中で矮小化しないためにも、キリスト教主義と国際主義の連携が重要な鍵となるだろう。

### （3）平和主義の再構築

戦後、同志社が戦争の時代とどのように向き合ったのかは検証すべき課題であるが、戦後の同志社史において、戦争の時代を踏まえ「平和主義」が明瞭な形で掲げられることはなかった。同志社の歴史的教訓を現代において生かすためには、「キリスト教主義」の内実を支える柱の一つとして「平和主義」を打ち立てることは決して無意味なことではないだろう。

### （4）自由の拠点として同志社

1925年に制定された治安維持法は、すでに見てきたように、思想の自由を奪い、同志社の教員を検挙・逮捕に至らしめた。また、伊東柱は治安維持法によって学生生活だけでなく、その命を奪われることになった。「自由」は新島の生涯を貫く最重要キーワードの一つであり、また、同志社が守り、発展させるべき価値である。新島がモデルとしたアメリカにおいて「自由」のあり方が大きく揺らぐような昨今の世界情勢を見ても、同志社は「自由の拠点」として社会に貢献すべきであろう。

【参考】千玄室氏の生涯（1923～2025）

## 第6章 同志社の再建—総合大学の出発（1945～1960年）

林田 明

### （1）敗戦後の同志社

同志社の創立は黒船来航から明治維新にかけての日本の「開国」によって実現した。太平洋戦争の終結と連合国の日本占領という「第二の開国」もまた、同志社を大きく変貌させた。戦時下に抑圧されたキリスト教主義教育が復活し、六・三・三・四制の学校体系への変更などの学制改革に応じて教育体制が刷新されたのである。1948年に神・文・法・経済の4学部からなる新制大学が開設され、翌年には商・工学部、さらに同志社女子大学が発足した。

東西冷戦の顕在化という世界情勢の影響を受けて占領政策の方針が「改革よりも経済復興」へと転換し、朝鮮戦争による特需景気によって日本経済が戦後の不況を脱出するに伴い、全国の大学数と学生数は戦前に比べて大幅に増加していった。その中で同志社は日本有数の総合大学を持つ学園へと変貌した。

### （2）寄附行為に示された教育理念の変遷

戦時体制に従って改変された同志社の寄附行為には、それまでの「智徳併行ノ主義」という教育理念に代えて「皇国民ノ錬成ヲ目的トシ基督教ノ精神ヲ採ツテ徳育ニ資ス」ことや「教育ニ関スル勅語ヲ奉戴シ聖旨ヲ遵守教育ノ実績ヲ挙クル」ことが謳われていた。新体制の同志社の寄附行為ではこれらの条文が削除され、「教育基本法及び学校教育法に従い、キリスト教を徳育の基本とする学校を経営し、もって教育の実を挙げることを目的とする」ことが示されるようになった。ただし、新島が最も重要と考えていた「智徳併行ノ主義ニ基キ教育ノ業ヲ挙クル」という文言が復活することはなかった。「教育基本法及び学校教育法に従い」という表現は、同志社が私学としての特性を失い、画一的な大学の一つとなっているように感じさせる。

### （3）一般教育の展開

新制大学の特徴の一つは、当時アメリカで提唱されていた一般教育、すなわち社会の幅広い層の人々に自由社会の市民としての基礎を与えるために人文学、社会科学、自然科学の総合を重視するカリキュラムが導入されたことである。同志社大学には一年次と二年次生を収容する教養学部が設けられたが、その理念は新島が学んだアーモスト大学のリベラル・アーツを継承したものであった。しかし、規模の拡大した同志社ではその実現が難しく、教養学部は短期間で廃止され、その後、一般教育は職業準備や専門科目の基礎としての役割に置き換えられていった。

一般教育の理念には「知性の発達に刺激と指針とを与えるばかりでなく、更に人間をして道徳的責任を自覚せしめる為に価値の評価と識別に対する能力を助成」という目的が含まれ、「智徳並行」という概念に通ずる。これらはまた、新島が信じた「その生徒の独自一己の気象を發揮し、自治自立の人民を養成する」という「私立大学特性の長所」を發揮するために重要なものである。

## 第7章 学生運動と大学改革——大衆化された大学の中の学生たち (1961～1980年)

中村信博

### (1) 大衆化と実学重視とが迫る大学理念の課題

高度経済成長と進学率上昇によって、大学は「エリートの学び舎」から「大衆の学び舎」へと変化した。伝統的な教育理念と大学自治は、産学協同や即戦力養成といった実学主義によって問い直されることになった。その問いかけの主体は大衆化された大学の中の学生たちであった。経済的達成の一方で、東西冷戦の緊張、ベトナム戦争、2度の安保闘争（60年、70年）、1968～69年の社会運動、さらにドルショックやオイルショックなどによって、社会の分断と不信は増幅した。同志社も例外ではなく、制度改革と運営体制の再構築、大学の公共性と社会責任が、日々の課題として激しく問われた時代であった。

### (2) 1969年——自治・対話・公権力

大学管理法案\*への反対を契機に、同志社でも学内封鎖やバリケード、ストライキが連鎖し、学生との会見など、対話の要求が繰り返され、学生の行動は市街地にも及んだ。機動隊導入とロックアウトが決定され（『百年史』通史編、1500-1503頁）、大学は「自主解決」を断念。女子大学では紛争化は回避されたものの、全学ストライキやデモ行進が展開された。同志社史において、学生がはじめて「主語」として登場した時代となったのではないか。

### (3) 回復の兆しと「シラケの時代」

封鎖解除と授業再開は一応の回復ではあったが、熱気は急速に失われ、討論の場は空洞化した。警戒下の登校風景や「シラケの時代」とする記録（『百年史』通史編、1507頁）は、単なる沈静化ではなく、歴史の主体を自覚した直後でありながら、希望の喪失と無関心の兆候でもあった。封鎖解除直後に良心碑が無傷であったことの意味は、今後も問われるべきだろう。

### (4) 自由大学・自主講座——良心（共通認識）の再形成

大学制度が麻痺する状況で、自由大学や自主講座は「国家の暴力装置を借りた解決」への異議申し立てとして、知の継続と対話の回復をめざすものであった。ここで「良心」を「共通認識」と読み替える視点は、大学を単なる即戦力養成機関にしないために重要である。「深山大沢」（新島）は、多様な学びが生成される自由な環境の比喻であり、今日の大学が管理強化や市場原理のもとで「小玩器の製造場」へと傾く危険に抗して、歴史の教訓を現代化するための課題となるだろう。1969年前後の経験は過去の逸話であるどころか、大学設置基準の大綱化（1991年）以降の大学改革は、一定の合理性を伴いつつも、評価競争とガバナンスを強め、この時代に問われたことの今日的示唆を含むように思われる。

\*「大学の運営に関する臨時措置法」（1969年公布、1999年廃止）。学長権限の強化、設置者が教育研究活動を停止しうる措置を規定。

## 第8章 二校地問題と大学教育の変容——管理される私学（1981～2003年）

沖田行司

### （1）田辺移転は何故必要であったか

高度経済成長期における大学進学率の高まりと日本経済の発展は高等教育に多様な人材の養成を必要とするようになった。とりわけ高等教育の80%を占める私学に対する期待と役割は大きいものがあつた。こうした状況下で、京都御所と相国寺に挟まれた同志社大学の校地面積は学生数の増員や新しい学部・学科の新設の障壁となつていた。特に実験後の廃液水の処理を巡って、厳しい制約を受けていた工学部の発展には新しいキャンパスが不可欠な状況にあつた。そこで近畿日本鉄道が所有していた田辺町（現京田辺）の土地を獲得して田辺キャンパスの開発に着手することになった。同志社田辺校地の開校は、奇しくも、かつて新島襄が南山義塾の開校に駆け付けて祝言を述べてからちょうど100年目にあたる。南山義塾はその後、私立三山木中学校となり、1886年に森有礼文部大臣が発令した官学を中心とした学校令で、一府県一中学校の原則の下、京都府立中学校に統合されていった。

### （2）二校地化の問題点

田辺移転に対しては大規模化に伴う学問の自由と大学の主体性を危惧する学生や二校地勤務の在り方をめぐって教職員の中から反対の意見もあつた。田辺校地では、開校時は1～2回生のいわゆる教養科目の履修と各学部の基礎教育のカリキュラムが用意されていた。3～4回生になると今出川で専門科目を中心に履修するという方法が採用された。少し遅れて工学部の1～4年次及び工学部の大学院が田辺で学び、やがて文系学部にも1～2回生が徐々に今出川に移つた。その後、実験を伴う学部が田辺に増設された。このように、田辺と今出川でそれぞれ自己完結するようになると、職員は移動があるが、今出川と田辺の各学部にも所属する教員の交流も少なくなつた。また、学生のサークル活動も分断され、とりわけ体育会に所属する2500人近い学生の中には今出川で学ぶ学生も少なくなく、特にラグビーや野球などのチーム・スポーツに所属する学生にとっては、全員そろつての練習時間が確保しにくくなつていく現状もある。チーム・スポーツの活性化は卒業生と在校生を一体化させ、母校愛を醸成するに重要な要素となつていく。二校地化以来、この問題に関して抜本的な改革はなされてこなかつた。

### （3）私立大学の自主性と教育改革

1990年代から大学改革の基本方針を文科省が提示するようになり、これに沿つた改革に助成金が配分されるようになった。私学の教育理念の明示を義務付けながらも、他方では認証評価制度が採用され、文科省が認めた機関で定期的に有料の認証評価を受ける事が義務付けられるようになった。大学教育の質的保証を名目に、各私学の独自の教育が失われてゆく恐れも否定できない。同志社でしか学べない学問、同志社でしか受けられない教育とは何か、新島が提唱した智徳並行の教育を実現する方法とは何か、現在の同志社に突き付けられた課題は大きい。

## 第9章 21世紀の同志社——教育体制の発展（2004年～現在）

神田朋美

### （1）自由主義の再考

現在の同志社大学と同志社女子大学が掲げる教育理念の特徴のひとつとして、「自由主義」の衰退を挙げることができるのではないだろうか。これは、「自由」という言葉が持つ意味の広範性に一因があると考えられる。現代において「自由」が用いられる場合、「自分の心のままに行動できる状態」と「先例、しかるべき文書、道理などを無視した身勝手な自己主張」が混在し（ジャパンナレッジ、<https://japanknowledge.com/introduction/keyword.html?i=115>）、この二つの境界線がひどく曖昧なものとなっている印象を受ける。

新島における「自由」とは、道徳を持った自由、キリスト教の神の愛に通ずる、あらゆる執着から解放された自由、すなわち我儘とは明確に異なる自由である。同志社女子大学が、「自由主義」という言葉を用いずに「キリスト教主義」のなかで新島の自由理解、同志社における自由についての確に言語化していることは、文言の一人歩きや誤解を防ぐことの重要性を示しており、教育理念としての「自由主義」という表現の在り方を再考する必要もあるのではないだろうか。

### （2）同志社に求められているもの

2012年11月に学校法人同志社が「医科大学（医学部）設置基本計画検討チーム」設置発表会見で明らかにした、全国10の自治体から医学部設置要請が届いたという事実は、日本社会が求める同志社像の一葉を明確に描き出している。今日、数多く存在する医療系口コミサイトを見れば、医療従事者に対して高い人間性が求められていることは明らかであり、その育成を同志社ならばできると判断されたからこそ、10に上る医学部設置要請だったのではないか。高い人間性の育成に関する要求は医科学系学部学科に限ったものではなく、すべての学部学科に求められているものと考えられる。「知・徳・体」の三位一体と調和を、「国・土」を表すアッシリア文字「ムツウ」の図案化により徽章とした同志社の意思を、あらためて心に刻む必要性を覚える。

### （3）私学同志社の誇り

文部科学省は、2024年に発表した「急速な少子化が進行する中での将来社会を見据えた高等教育の在り方について（中間まとめ）」の中で、高等教育の目指すべき姿を「知の総和」と表しつつ、「経済成長では測りきれない、幸せや生きがい、豊かさを感じる個人を形づくる場としての高等教育の役割も必要」と（文部科学省、[https://www.mext.go.jp/content/20240808-mxt\\_koutou02-000037412\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20240808-mxt_koutou02-000037412_1.pdf)）、「人ひとり」に着目した一文を記している。

新島は、1884年、国立大学と同志社の卒業生を引き比べ、同志社は「高い道徳性と熱心なクリスチャン的性格」「純粋な目的」の点において日本社会から高い評価を得ているとアメリカン・ボードへ報告している（『新島襄教育宗教論集』、211頁）。このことは、同志社のキリスト教主義教育が古くて新しく、今なお多くの可能性を持つことを示しているのではないだろうか。

## 「同志社創立 150 周年記念式」(2025 年 11 月 29 日) 関係情報

◎ 同志社創立 150 周年記念式の動画



◎ 小原克博 講演「同志社 150 年の歴史と精神を語り継ぐ」

動画



テキスト



◎ 『読売新聞』2025 年 11 月 29 日、朝刊



◎ 『日本経済新聞』2025 年 11 月 30 日、朝刊



### 同志社大学 良心学研究センター編の刊行物

『良心を考えるために』2017 年、増補改訂版 2018 年(無償配布)。

『良心学入門』岩波書店、2018 年(本体 1,500 円+税)。

『新島襄 365』2019 年(無償配布、Amazon Kindle 版あり)。

『良心から科学を考える——パンデミック時代への視座』岩波書店、2021 年  
(本体 1,600 円+税)。

『パンデミック時代における良心』2021 年(無償配布、Amazon Kindle 版あり)。

『同志社精神を考えるために』2023 年(無償配布、Amazon Kindle 版あり)。

*Joseph Hardy Neesima and the Doshisha Spirit*, 2023. (無償配布、下記 URL 参照)

<https://www.doshisha.ac.jp/en/information/president/learn/index.html>